



人間だけじゃない！！

ペットと一緒に熱中症対策しよう



梅雨の時期が過ぎて晴れ間も増えてきたことで暑いと感じる日が増えてきました。今後さらに気温が高くなる日も続いてきます。これからの時期に特に注意が必要になるのが「**熱中症**」。
しかし、気を付けなくてはいけないのはペットのご家族だけでなく一緒に暮らしている「**ペット**」たちも同じです。

そもそも熱中症とは？

熱中症は高温多湿な環境下に長い時間晒されてしまうことで人と同じように体温調節が出来なくなり、高体温や脱水、さらに悪化すると体内の臓器にも悪影響を及ぼし、命に関わる危険性がある「**病気**」です。



人間との違いはある？

人は全身で汗をかいて体温調節ができる事に対し、犬や猫たちは汗をかく事ができません。口で呼吸する事により体内にある熱を逃がそうとします。また、元々の体温が人間よりも高い為、少しの体温上昇により熱中症の重症化してしまうリスクが高くなります。

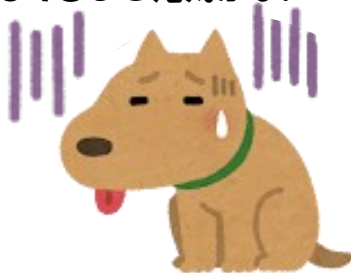
犬や猫だけでなく
僕らのような小動物も
呼吸が荒くなったり
ぐったりするよ

熱中症の時ってどんなサインが出る？



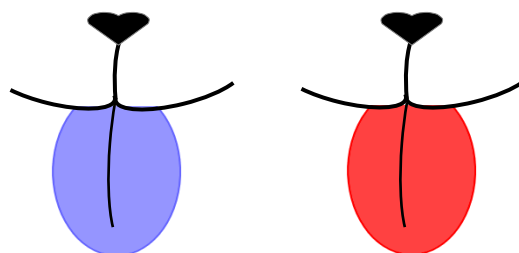
・ぐったりとして元気がない

・ゼエゼエやハアハアといつもより呼吸が荒い



・身体を触ると熱い

・舌の色がいつもと違う
(例：青紫色や真っ赤など)



熱中症のリスクが高い犬・猫の特徴

・短頭種(鼻が短い)

⇒鼻が短く呼吸で熱を逃がすのが苦手なため

犬種の例)パグ

ブルドッグ(フレンチブルドッグ)

ペキニーズ など

・長毛種(寒冷地原産国な子)

⇒毛の密度が高く熱がこもりやすいため

犬種の例) ゴールデンレトリバー

シベリアンハスキー

グレートピレニーズ など

猫種の例) ペルシャ

エキゾチックショートヘア

ヒマラヤン など

猫種の例) メインクーン

ノルウェー・ジャンフォレストキャット

ヒマラヤン など

・高齢な犬や猫

⇒体温を調節する機能が低下しているため

・子犬や子猫

⇒体温を調節する機能がまだ未発達であるため

・肥満体型

⇒体の脂肪により体内の熱がこもりやすく、熱が外へ逃げにくい



こんな場所・時間には特に注意してください

閉めきった室内



車内放置



暑い日の散歩する時間



熱中症かもしれない時は

熱中症の可能性が疑われる時は速やかに動物病院へ受診してください。

来院する時には

・犬や猫たちの体をタオルに包んだ保冷材やアイスバックなどを首や脇の下、太もも周辺の太い血管があるところに当てる

・常温の水で濡らしたタオルで全身を包み、うちわなどで仰ぎ風を送るなどの応急処置をしながら来院してください。

1人で来院する時には

・ネット包帯もしくはストッキングを使い、首元を保冷してあげてください。

車でお越しの時には

・車のクーラーをかけ、車内全体が冷えてから移動して下さい。

※注意点！！

早く冷やしてあげようと冷水や氷などで冷やし過ぎると血管が収縮されることで却って体内の熱が逃げにくくなり体温が下がらず逆効果となってしまうので注意が必要です。



大切な家族である犬や猫、小動物たちは人間のように言葉で自分の意思を伝えることができません。だからこそ、熱中症を未然に防ぐことや私たちがペットの異変に早めに気付いてあげることで熱中症による命の危険のリスクを下げる事が出来ます。